

ファイザープログラム
心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援

2023 年度
選考結果のご報告

2023 年 12 月

ファイザー株式会社



患者さんの生活を大きく変えるブレイクスルーを生み出す

— 目 次 —

| | |
|------------------------------|----|
| 1. プログラム紹介 | 1 |
| 2. 2023 年度新規助成 応募状況 | 2 |
| 3. 2023 年度助成対象プロジェクト一覧 | 4 |
| 4. 新規助成の選考経過と助成の特徴 | 6 |
| 5. 新規助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由 | 9 |
| 6. 継続助成の選考経過と助成の特徴 | 14 |
| 7. 継続助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由 | 18 |

プログラム紹介

ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援は、ヘルスケアの視点を重視したより良い社会への寄与を目的として、心とからだのヘルスケアの分野で活躍が期待される市民活動・市民研究を応援する助成プログラムです。

第23回となる本年度は、新規助成として全国から67件のご応募をいただき、そのうち8件（助成総額1,482万円）が、また、継続助成として7件のご応募をいただき、そのうち6件（助成総額981万円）が、それぞれの選考委員会による厳正なる選考の結果、助成対象プロジェクトとして選ばれました。

■ プログラム創設の目的

- (1) ヘルスケアの領域で今後一層の活躍が見込まれる市民活動を発掘し、その活動を後押しすること
- (2) これからの社会の担い手として重要な役割が期待される市民活動自体の社会的認知を高めること

■ プログラムの特徴

- (1) ヘルスケアを広く捉え、本業（医薬品の開発と提供）だけでは十分に満たすことのできないヘルスケアの分野で活動する市民団体を支援対象としていること
- (2) 政府や自治体などの公的機関からのサービスや社会資源が十分に整っていない分野における市民活動とともに、市民研究も重点的に支援していること
- (3) 団体としての過去の実績ではなく、その団体が取り組もうとしているプロジェクトの独創性・試行性に評価の重点を置いていること
- (4) 単年だけではなく、継続した支援も行なっていること
- (5) プロジェクトに携わる人の人件費や、事務所家賃・光熱費などの事務局経費も前向きに助成すること
- (6) 中間時点でのインタビュー実施によるフォローアップを行なっていること
- (7) 市民活動・市民研究の社会的認知の向上を目的とした広報活動も重視していること

■ 助成対象

心とからだのヘルスケアに取り組む市民活動および市民研究

■ 選考委員会

《新規助成》

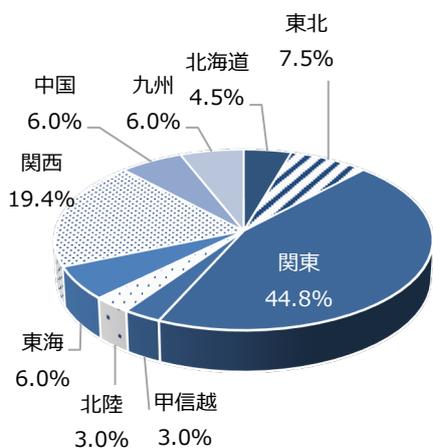
| | | |
|-----|--------|----------------------------------|
| 委員長 | 青木 聖久 | 日本福祉大学 福祉経営学部 教授 |
| 委員 | 磯野 真穂 | 医療人類学者 |
| 委員 | 清田 仁之 | 特定非営利活動法人 月と風と 代表 |
| 委員 | 森 幸子 | 一般社団法人 日本難病・疾病団体協議会 監事 |
| 委員 | 横田 能洋 | 特定非営利活動法人 茨城NPOセンター・commons 代表理事 |
| 委員 | 喜島 智香子 | ファイザー株式会社 コミュニティ・リレーション部 スペシャリスト |

《継続助成》

| | | |
|-----|--------|---|
| 委員長 | 西村 ユミ | 東京都立大学 健康福祉学部／人間健康科学研究科 教授 |
| 委員 | 青木 聖久 | 日本福祉大学 福祉経営学部 教授 |
| 委員 | 清田 仁之 | 特定非営利活動法人 月と風と 代表 |
| 委員 | 熊谷 紀良 | 社会福祉法人 東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター 統括主任 |
| 委員 | 森 幸子 | 一般社団法人 日本難病・疾病団体協議会 監事 |
| 委員 | 喜島 智香子 | ファイザー株式会社 コミュニティ・リレーション部 スペシャリスト |

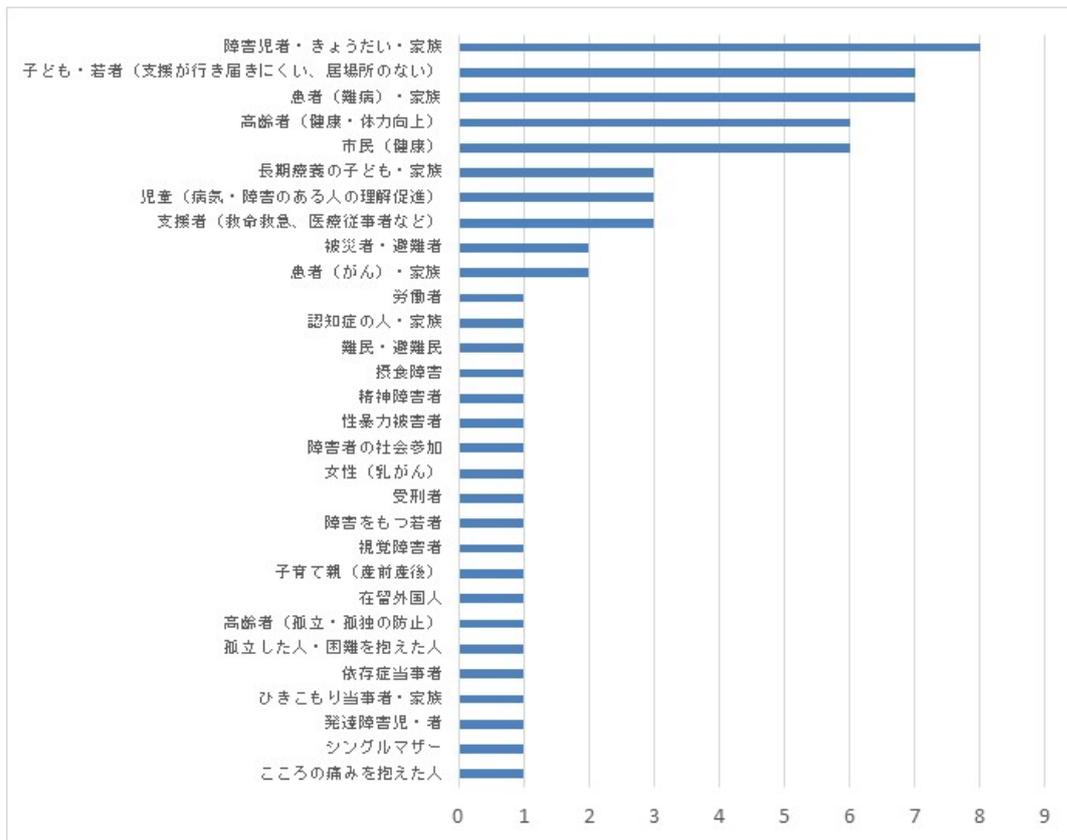
2023 年度新規助成 応募状況

1. 団体所在地



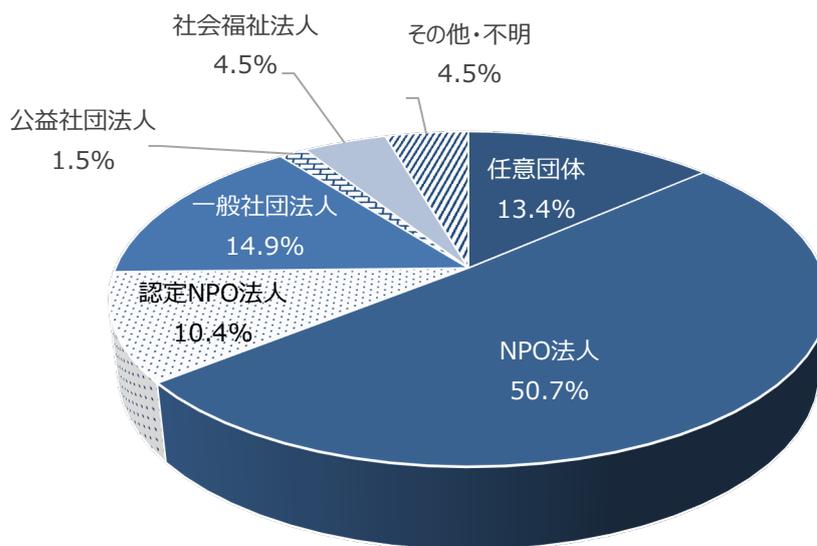
| 都道府県 | 団体数 | 割合 | 都道府県 | 団体数 | 割合 | | |
|------|-----|------|------|-----|----|------|-------|
| 北海道 | 3 | 4.5% | 滋賀 | | | | |
| 東北 | 青森 | | 京都 | | | | |
| | 岩手 | 2 | 関西 | 大阪 | 6 | 13 | 19.4% |
| | 宮城 | 2 | | 兵庫 | 7 | | |
| | 秋田 | | | 奈良 | | | |
| | 山形 | | | 和歌山 | | | |
| | 福島 | 1 | | 中国 | 鳥取 | | |
| 関東 | 茨城 | | 島根 | | 2 | | |
| | 栃木 | | 岡山 | | 1 | | |
| | 群馬 | | 広島 | | | | |
| | 埼玉 | | 山口 | 1 | | | |
| | 千葉 | 2 | 四国 | 徳島 | | 0 | 0.0% |
| | 東京 | 22 | | 香川 | | | |
| | 神奈川 | 6 | | 愛媛 | | | |
| 甲信越 | 山梨 | 1 | 高知 | | 九州 | 4 | 6.0% |
| | 長野 | | 福岡 | 1 | | | |
| 北陸 | 新潟 | 1 | 佐賀 | 1 | | | |
| | 富山 | 1 | 長崎 | | | | |
| | 石川 | 1 | 熊本 | 1 | | | |
| 東海 | 福井 | | 大分 | 1 | | | |
| | 静岡 | | 宮崎 | | | | |
| | 愛知 | 1 | 鹿児島 | | | | |
| | 岐阜 | 2 | 沖縄 | | 0 | 0.0% | |
| | 三重 | 1 | 計 | | 67 | 67 | 100% |

2. 支援対象の分類

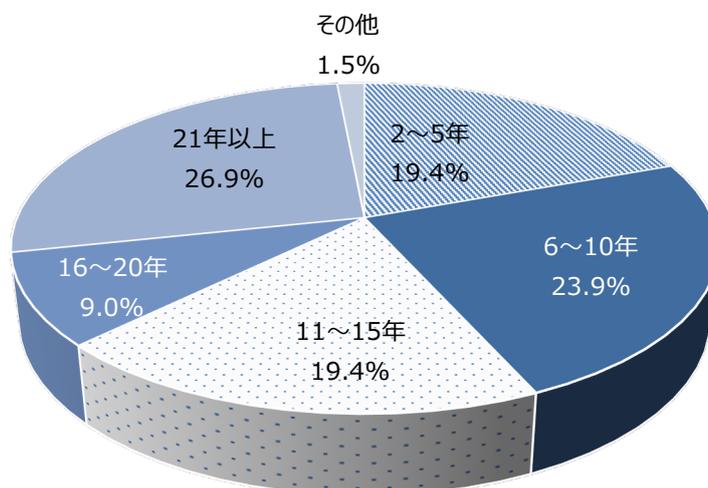


3. 組織形態

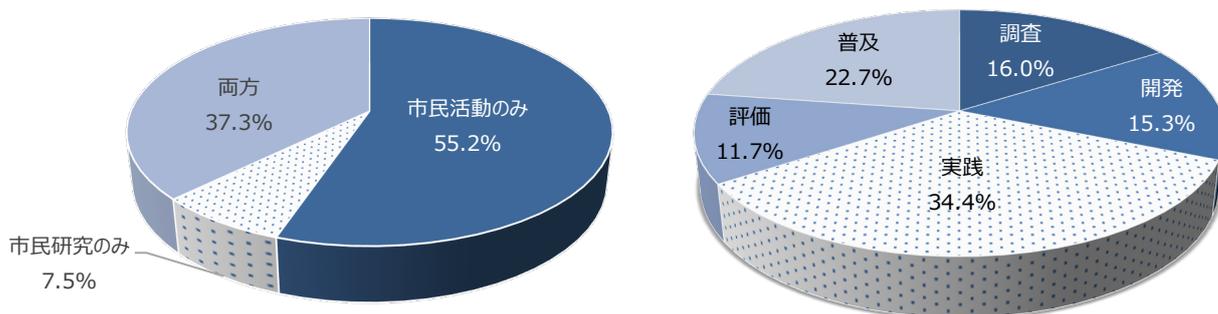
○法人格



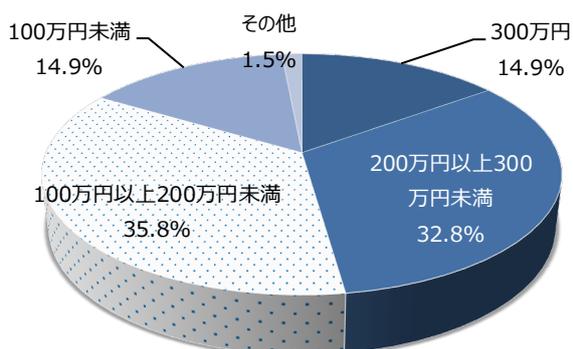
○活動年数



4. 応募種別



5. 応募金額



2023 年度助成対象プロジェクト一覧

— 新規助成 —

| | 活動 | 研究 | プロジェクト名 | 団体名 | 代表者 | 所在地 | 助成額 (万円) |
|-------------------------------|----|----|---|--------------------------|-------|-----|-------------|
| 1 | ○ | | 難民・避難民を含む在留外国人の精神科医療アクセス向上のための取り組み | 社会福祉法人 日本国際社会事業団 | 永坂 哲 | 東京 | 158 |
| 2 | ○ | ○ | 合理的配慮が必要な刑事被拘禁者支援事業 ～心身のケアと新型コロナ対応 | 特定非営利活動法人 監獄人権センター | 海渡 雄一 | 東京 | 130 |
| 3 | ○ | | 反貧困ネットワーク 居場所プロジェクト～『Champora-ちゃんぽらー』～ | 一般社団法人 反貧困ネットワーク | 宇都宮健児 | 東京 | 230 |
| 4 | ○ | | 難病者の生きる・働くセルフケアオンラインサービス開発に向けた調査・設計 | 特定非営利活動法人 両育わーど | 重光 喬之 | 東京 | 94 |
| 5 | ○ | ○ | 在留外国人のヘルスケア・アクセスを支える CSO プラットホームに向けた基盤整備 | 特定非営利活動法人 ISAPH | 小早川隆敏 | 東京 | 180 |
| 6 | ○ | | ものづくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指せる居場所の確立 | 一般社団法人 OHANA | 赤松 未来 | 神奈川 | 250 |
| 7 | ○ | ○ | 心の不調があってもふつうに働ける職場を自分たちで生み出したい！ | 特定非営利活動法人 あかりプロジェクト | 山口いづみ | 石川 | 270 |
| 8 | | ○ | 若者による 10 代のための自死遺族ピアサポート | 特定非営利活動法人 グリーフサポート・リヴ | 佐藤まどか | 大阪 | 170 |
| 助成総額 [8 件・合計] 1,482 万円 | | | | | | | |

(2023 年度の助成期間は 2024 年 1 月 1 日～12 月 31 日です)

2023 年度助成対象プロジェクト一覧

— 継続助成 —

| | 活動 | 研究 | プロジェクト名 | 団体名 | 代表者 | 所在地 | 助成額 (万円) |
|---------------|----|----|--|-----------------------------|-------|-----|---------------|
| 1 | ○ | ○ | 山谷の野宿者を継続的に医療に繋げるためのしくみづくり | 一般社団法人 結 YUI | 義平 真心 | 東京 | 240 |
| 2 | ○ | | 生活困窮状態にあるLGBT当事者の自立支援と地域ネットワーク構築 | LGBT ハウジングファースト を考える会・東京 | 松灘かずみ | 東京 | 150 |
| 3 | ○ | | リージョナルセンターのための膵癌 SCN サポーター養成講座開発プロジェクト | 特定非営利活動法人 パンキャンジャパン | 眞島 喜幸 | 東京 | 165 |
| 4 | ○ | ○ | 食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究 | 認定特定非営利活動法人 FaSoLabo 京都 | 楠 隆 | 京都 | 150 |
| 5 | ○ | ○ | コミュニティパントリー活動を広げるためのフードバンク活動連携事業 | 特定非営利活動法人 eワーク愛媛 | 難波江 任 | 愛媛 | 166 |
| 6 | ○ | | 病気や障害のある人達と仲間ナビする出会い、体験、まち歩き事業 | 特定非営利活動法人 わくわーく | 小橋 祐子 | 福岡 | 110 |
| 助成総額 [6 件・合計] | | | | | | | 981 万円 |

(2023 年度の助成期間は 2024 年 1 月 1 日～12 月 31 日です)

新規助成の選考経過と助成の特徴

新規助成 選考委員長 青木聖久

【はじめに】

本年度（2023年度）の応募件数は67件（昨年度93件）で、昨年度から26件の減少が見られました。都道府県別では、昨年度と同様、四国・沖縄を除く各ブロックから応募をいただきました。その割合は、関東圏が最も多く44.8%、次いで関西圏が19.4%、東北圏が7.5%となり、東海・中国・九州圏が共に6.0%の順となりました。特徴として、関東圏を除けば例年に比べると地域の偏りが少ないことと、全体に占める東北圏の応募割合が増え続けていることが挙げられます。

予備選考では31件が選出され、昨年度よりも2割程度少ない件数が本審査の対象となりました。本審査対象プロジェクトは、いずれも心とからだのヘルスケアにおいて重要な課題に取り組んでおりました。そして、後述するように、複数の審査を経て、特にファイザープログラムに合致し、発展性のある8件を助成対象に決定しました。以下に、選考過程と結果を示します。

【選考経過と結果】

新規助成の選考は、以下の日程および手続きにより実施されました。

- ・ 応募期間：2023年6月12日（月）～6月30日（金）
 応募件数：67件（参考：2022年度93件）
- ・ 予備選考委員会：7月25日（火）
 選考結果：本審査対象31件を選出
- ・ 書類選考：7月28日（金）～8月17日（木）
- ・ 本選考委員会：8月22日（火）
 選考結果：助成候補10件を選出
- ・ 事務局ヒアリング：8月29日（火）～9月22日（金）
 社内コンプライアンス委員会：選考と並行してコンプライアンス確認作業を実施
- ・ 選考委員長決裁：10月4日（水）
 助成決定：助成対象8件、助成総額1,482万円

【書類選考・選考委員会】

書類選考は、委員長も含めて6名の選考委員によって行われました。各委員が、専門性をもとに、ファイザープログラムのテーマとする「心とからだのヘルスケア」に関する市民活動・市民研究支援という視点から、選考基準に沿って評価を行いました。この審査においては、各委員が推薦6件、準推薦3件の計9件を選出し、評価結果と推薦理由および助成にあたっての課題を提出しました。

提出された案件は、「推薦4」の評価を受けたプロジェクトが3件、「推薦3+準推薦2」が1件、「推薦3+準推薦1」が2件、「推薦3」が1件、「推薦2+準推薦3」が1件、「推薦1+準推薦2」が1件、「推薦1+準推薦1」が2件、「推薦1」が6件、「準推薦2」が2件となりました。選考にあたっては、「推薦1+準推薦1」以上の全てのプロジェクトに対して、各委員が評価

できる点と課題、改善点などを述べ、その後に議論をするというステップを踏みました。その際、意見が分かれた場合は、さらに推薦のポイントや問題点などを具体的に提示し合い、全委員が納得するまで議論を重ねて「助成候補」を決定しました。

選考委員会では助成候補 10 件を選出し、その後に行われた事務局から各団体へ対面、あるいは、オンラインによるヒアリングの結果を受けて、最終的に委員長決裁にて 8 件を助成対象として決定しました。

【助成プロジェクトの特徴】

2023 年度の選考において採択された新規プロジェクトをテーマ別に示すと、次の通りとなります。

■ 安心、安全の生活の基盤づくりとしての居場所づくりをテーマとするプロジェクト

『反貧困ネットワークニコニコ居場所プロジェクト』（一般社団法人反貧困ネットワーク）は、貧困状態にある人やシェルター入居者、さらにはそこを卒業した人を対象にして支援をします。とりわけ孤独・孤立状態に置かれている人に対して、新たな居場所づくりや外出支援を実施します。これらのことを、伴走型支援の一環として取り組み、人と人とのきずなを深め、つながることを目的にした場づくりをめざします。

『ものづくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指せる居場所の確立』（一般社団法人 OHANA）は、専門職がいるアトリエや農地を活用した居場所を地域のなかに確立していきます。そこでは、それらの場を介しての専門職や地域の人との交流を楽しみつつ、作品等が完成されていくプロセスに意義を見出します。そして、これらのことに性被害当事者が参加することによって、生活リズムの構築はもとより、人とのつながりを実感するなかで社会復帰をめざします。

これら 2 つのプロジェクトは、何らかの事象からエネルギーが減退せざるを得ない状況にある人に対して、社会において安全で安心できる居場所づくりをめざしたものであることが、特長だと言えるでしょう。また、取り組みでは、専門職や地域住民とのつながりが意識化されており、社会的孤立からの脱却、人と社会がつながることで生み出される可能性が期待できます。

■ 生きる、暮らす、働く、という統合的な生活支援をテーマとするプロジェクト

『合理的配慮が必要な刑事被拘禁者支援事業～心身のケアと新型コロナ対応』（特定非営利活動法人監獄人権センター）は、合理的配慮が極めて遅れている刑務所や拘置所の被拘禁者が適切な支援を受け、心身の健康を保つことに取り組みます。そのための具体的な方途を、元刑務官や看護師、カウンセラー等で検討します。これらのことを通して、実行可能な施策の提案を行うことで、被拘禁者のスムーズな社会復帰を促進し、再犯の防止に資することをめざします。

『心の不調があってもふつうに働ける職場を自分たちで生み出したい！』（特定非営利活動法人あかりプロジェクト）は、摂食障害等の生きづらさを持つ女性たちの「ふつうに働きたい」という願いにこたえ、有機野菜の栽培、加工、販売、レストラン運営から、働ける職場モデルの枠組みを作ることに取り組みます。これらのことを通して、のびのびした職場モデルの確立を社会に提示することで、同じような願いを持つ人たちの生活の質の向上をめざします。

『難病者の生きる・働くセルフケアオンラインサービス開発に向けた調査・設計』（特定非営利活動法人両育わーど）は、医療、福祉、就労、就学等において、制度の狭間にいることが少なく

ない難病者に対して、多様な生き方・働き方等の情報につながるネットワークの構築に取り組みます。そのことによって、難病者の孤立を防ぎ、難病がありながらの働き方、生きがいを持った暮らしのあり方を知ることが出来るよう、インターネットでのセルフケアサービスの開発をめざします。

これら3つのプロジェクトは、社会的に支援が必要な人を対象にして、生きる、暮らす、働く、さらには、よりよく暮らすための統合的な生活支援を志向したものとなっています。また、支援対象者や関係者に対して、多くの情報や選択肢を可視化して伝えることで、多様性に富む複線型の生き方ができる社会の構築が期待できます。

■ 地域でのつながり、有効的なアクセス構築のための支援システムの構築をテーマとするプロジェクト

『難民・避難民を含む在留外国人の精神科医療アクセス向上のための取り組み』（社会福祉法人日本国際社会事業団）は、外国籍住民が精神科医療を問題なく受診するにあたっての課題を調査によって明らかにします。また、すでに明らかになっている課題としての通訳や、既に想定されている文化的ハードル等の事柄に対して、オンラインの活用をはじめ、フォーマル・インフォーマルな機関や人が連携するためのモデルの構築をめざします。

『在留外国人のヘルスケア・アクセスを支えるCSOプラットフォームに向けた基盤整備』（特定非営利活動法人ISAPH）は、在留外国人に対して、橋渡し機能を發揮している市民社会組織の孤立の解消に取り組みます。そのため、つながりを目的にして、外国人支援を行うボランティア、専門職、医療機関、行政などと市民社会組織が話し合いをし、自らの地域や活動内容に囚われることなく、互いの課題の共有化をめざします。

『若者による10代のための自死遺族ピアサポート』（特定非営利活動法人グリーフサポート・リヴ）は、自死遺族の10代の中高生に対して、個人が葛藤する力を支え、悩み、知り、自己決定して生きていく力を醸成できるように取り組みます。そのため、それらの10代の中高生に対して、安全な場を提供します。そして、彼らが同じ境遇の仲間とつながり、語り、共感し、孤立感から解放されることで自己肯定感を高め、暮らしやすくなることをめざします。

これら3つのプロジェクトは、社会において様々な要因から孤立化している個人、さらには、団体がつながることによって、個人の暮らしの向上に取り組みます。そして、これらのことを実現するための具体的なアクセス方法を検討し、システム構築をすることで、個人や団体はもとより、体力のある社会づくりに期待できます。

【おわりに】

私は、2018年度よりファイザープログラムの選考委員を務めさせていただく機会を得て、さらには、2022年度より委員長の大役を仰せつかっています。この6年間、多くの応募企画書を通して、人や団体がもつ力と可能性を感じ取っております。

選考にあたっては、大切な応募企画書を、ファイザープログラムの趣旨に照らし合わせながら審査をいたしました。そのことを、少し振り返りたいと存じます。

人が健康であるためには、身体面と精神面の両方が大切だと言えます。一方で、人は自らの健康に対して、必ずしも自覚的ではありません。また、人は仮に自身の健康が阻害されていても、周囲にSOSを出すとは限りません。ただし、そのようにSOSを出さない・出せないのは、

社会を信頼できないから、あるいは、相談する社会の仕組みが分かりづらいから、ということが背景にあるかもしれません。加えて、孤立状態に置かれている人もいると考えられます。そのようなことから、人が健康であるためには、個と社会の双方への、創意と工夫を凝らしたアプローチが求められることとなります。

そこで、国や自治体は、法律や条例等によって、人々が健康になるために、多くの制度等を作っています。実際、応募団体も、これらの使える制度は最大限活用されているのではないのでしょうか。

ところが、その制度が届いていない人が存在します。あるいは、既存の社会システムそのものに課題があることによって、制度はもとより、周囲とつながっていない人もいるのです。

これらの実態に対して、2023年度において、67の団体の皆さんは、市民団体だからこそ気づかれ、さらには、市民団体だからこそその発想によって、プロジェクトとしてまとめ、実際に応募されたわけです。これらの各市民団体の英知は、本当に社会の財産だと感じております。心より、敬意を表したいと存じます。

最終的に助成を決定したのは、8団体となりました。ですが、残念ながら今回採択に至らなかった団体におかれましては、今後も市民活動や市民研究を継続され、再度の応募を検討してくださいと幸いです。

最後に、2023年度の選考を終え、いま・ここで感じていることを述べさせていただきます。

自分自身を含めて社会で暮らす人たちが最終的にめざしていることは、誰しもきっと、幸せになることではないでしょうか。そのために、私たちは、生活の基盤づくりを通して、家に例えるならば、1階部分の生存レベルの「生きる」の達成を目指します。ところが、生存レベルを達成するための例えば、医・衣・食・住（い・い・しょく・じゅう；継続的な医療、衣服、食事、住まい）は、大事けれども、人生の目標にはなりません。そこで、活動レベルの「暮らす」を達成するための、家に例えるならば、2階部分の居・飾・職・仲（い・しょく・しょく・ちゅう；居場所、生活の飾りとしての余暇等、報酬の有無に囚われない広い意味での働く、外形的な肩書に左右されない仲間）が大切だと考えられます。

ただし、人の暮らしは、1階部分の生存レベルの要素が整ってから、2階部分の活動レベルの要素の充足へ移行する、というものではありません。きっと、暮らしとは、1階部分と2階部分が循環するのではないでしょうか。例えば、2階部分が満たされ、生活が豊かになることによって、自分や周囲を大切にすべく、1階部分に目が向くというのは、人として、当たり前の姿として捉えることができます。

一方で、人は他者から尊厳をもって接せられれば、他者を信用することができます。なお、その他者には、人、団体、そして、社会を含みます。その社会において、私たちは、昨日までと全く同じ場所で暮らしていたとしても、他者との関係性によって、社会の景色の見え方が異なるのではないのでしょうか。人は、他者からのぬくもりを感じられれば、景色がほんのちょっぴり、やさしく感じられるはずです。

人と社会との相互関係に目を向け、つながりを志向した市民団体の皆さんの活動は、多くの人たちに間違いなく、今後も勇気を与え続けることでしょう。皆さんの今と未来を、心より応援しています。

新規助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由

| | |
|----------|------------------------------------|
| プロジェクト名： | 難民・避難民を含む在留外国人の精神科医療アクセス向上のための取り組み |
| 助成種別： | 市民活動 |
| 団体名： | 社会福祉法人 日本国際社会事業団 |
| 代表者名： | 永坂 哲 |
| 所在地： | 東京都 |

本団体は、人々が国境を越えることで生じるさまざまな問題の相談に応じる社会福祉法人であり、1959年以來の活動実績がある。

本プロジェクトは、難民・避難民を含む外国籍住民が、精神科医療を問題なく受診するための課題を明らかにするとともに、言語や文化的ハードルなど、外国籍患者に特有のニーズに対応するため、オンラインの活用とともに病院と民間団体や専門職が連携するモデルを構築することを目指す。

外国籍住民が抱えるメンタルヘルスの問題は、喫緊に解消すべき課題であるとともに、今後確実に需要が増えることが予想される。

選考委員会では、外国籍住民は今回のアンケートの対象である精神保健福祉センターではなく、はじめに精神科にかかるのではないかとといった意見も出されていた。各医療機関や、各地域の精神保健福祉センターですでに個別に蓄積されているナレッジを的確に吸い上げ、長い目で外国籍住民の助けになるような調査の実施とモデルの構築に期待したい。

| | |
|----------|-----------------------------------|
| プロジェクト名： | 合理的配慮が必要な刑事被拘禁者支援事業～心身のケアと新型コロナ対応 |
| 助成種別： | 市民活動 市民研究 |
| 団体名： | 特定非営利活動法人 監獄人権センター |
| 代表者名： | 海渡 雄一 |
| 所在地： | 東京都 |

本団体は、日本における刑事拘禁施設の人権状況を国際基準に合致するよう改善するとともに、刑罰手段におけるあらゆる差別をなくすこと、死刑廃止や拘禁刑の内容の改善、さらには、非拘禁処遇（保護観察や社会奉仕命令等）の使用促進を目的として設立された。

本プロジェクトは、日本の刑務所・拘置所の被拘禁者のうち心身に不調を抱える等、合理的配慮の提供が必要な人への支援とともに、新型コロナウイルスに関する情報が少ないという課題から、彼らに対して相談対応と情報提供を行う。それらに必要な支援の具体的な方法を、調査により検討し実施に繋げる。さらには、政策提言やセミナーの開催を通じ、社会に対する問題の周知を目指す。

刑務所内での暴行事件が明るみに出るなど、このプロジェクトの必要性は言うまでもなく、様々な立場を持つプロジェクトメンバーと連携し、被拘禁者の社会復帰に向けた支援体制の構築に期待したい。

プロジェクト名： 反貧困ネットワークニコニコ居場所プロジェクト
助成種別： 市民活動
団体名： 一般社団法人 反貧困ネットワーク
代表者名： 宇都宮 健児
所在地： 東京都

この団体は、住まいや生活に課題を持つ人に、シェルターのような住まいを提供したり、相談会などで福祉制度の利用を支援するなど、多様な支援団体とネットワークをつくり、国や行政への提言活動を続けている。

本プロジェクトは、経済的・制度的な問題ではなく、支援を必要とされている人の生き方、孤独という問題がテーマになっている。

日中に活動する居場所と多様な活動の機会、人との交流を通じて「つながり」を作ろうという試みである。シェルターの量の不足という問題も一方であるが、人間らしく生きる上で重要になる日中活動、人との共同の営みを、彼らの主体性を大事にしながら伴走支援をして育もうとする取り組みといえる。場に集う人の中から、どのような思いや動きが出て、それがどのような新たな活動やつながりを生み出すかに注目したい。

そして、その成果が他の居住支援に取り組む団体にも伝わっていくことを期待したい。

プロジェクト名： 難病者の生きる・働くセルフケアオンラインサービス開発に向けた調査・設計
助成種別： 市民活動
団体名： 特定非営利活動法人 両育わーど
代表者名： 重光 喬之
所在地： 東京都

本団体は、障害や難病のある当事者とその療養を支援する関係者の取り巻く環境を改善するための事業を通して、啓発や就労支援、団体運営支援等を行ってきた。

本プロジェクトでは、医療・福祉・就労・就学とあらゆる面で支援が届かない難病者を対象に、孤立して悩むことなく、暮らしと働きを含めて社会参加することができることを目的としたセルフケアオンラインサービスサイトの開設に向けた調査・設計に取り組む。

病名や症状に関係なく利用できるよう、疼痛・疲労・睡眠などの症状や生活リズム等を記入し客観視する、セルフケアを意識できることは体調管理に重要なことである。他の当事者の就業情報を取り入れながら、自分に合った働き方を選択できるサービスを目指す。これまで取り組んできた活動から得た情報や、専門家の知見、共に活動する患者団体などの協力もあり、効果を検証しながら運用を行う。多くの難病者の活用により、新たな政策提言が生まれることに期待したい。

プロジェクト名： 在留外国人のヘルスケア・アクセスを支える CSO プラットホームに向けた
基盤整備
助成種別： 市民活動 市民研究
団体名： 特定非営利活動法人 ISAPH
代表者名： 小早川 隆敏
所在地： 東京都

本団体は、長年にわたり海外において人づくりや地域づくりを支援し、地域住民の保健医療の向上を目指して活動を行ってきた。

本プロジェクトでは、福岡県において地域に暮らす在留外国人のヘルスケアにアクセスしにくい状況を課題と捉え、その解決に向けた取り組みを行う。今年度は助成 2 年目である。1 年目は、県内で生活支援を行う市民社会組織の外国人支援活動について約 550 の団体に調査を行い、その結果、外国人支援のために必要な情報がないという問題や、ヘルスケア・アクセスの幅広い課題や、支援の担い手不足、持続可能性の問題などがあることがわかった。

2 年目のプロジェクトでは、個々に行われている外国人支援の情報・資源をつなぎ、関係者が力を合わせて取り組むプラットフォームの構築を目指す。この目的の達成のために、既存の地域団体/ボランティアと医療機関、中間支援組織、行政等の連携し、学び合うための研修会を開催する。これらのプロセスからつながり支えられる仕組みが、外国人支援の基盤となることに期待したい。

プロジェクト名： ものづくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指せる居場所の確立
助成種別： 市民活動
団体名： 一般社団法人 OHANA
代表者名： 赤松 未来
所在地： 神奈川県

本団体は、全ての性犯罪被害当事者が、安心して心身の回復、社会参加できる世界の実現を目指すとともに、犯罪の原因となる貧困といった社会構造の解消も理念に掲げている。

性被害当事者にとって相当な心身の負担となる「話す」を通じた被害からの回復ではなく、安心したスペースでものづくりをしたり、農地で作物を作ったりしたりすることで、ゆっくりとした回復を目指すのが本プロジェクトの特徴である。

本プロジェクトは、昨年度からの連続した取り組みとなるが、助成 1 年目の活動が充実しており、助成金が適切に使われ、計画変更などの困難がありつつも、地元の警察や農家などの新たなご縁が生まれることで活動に広がりが出ていることが伺える。

プロジェクトの広がりをより盤石なものとし、地域の中で定着することを期待したい。

プロジェクト名： 心の不調があってもふつうに働ける職場を自分たちで生み出したい！
助成種別： 市民活動 市民研究
団体名： 特定非営利活動法人 あかりプロジェクト
代表者名： 山口 いづみ
所在地： 石川県

本団体は、摂食障害の当事者・家族・経験者や医療・福祉・行政・企業などの関係者に対して、摂食障害への理解を促す啓発活動を行うことで、摂食障害当事者の孤立化・長期化が起りにくい社会環境の整備に寄与することを目的としている。

本プロジェクトは、レストランや畑業務、野菜加工を通じて、摂食障害や他の精神疾患、生きづらさをもつ女性たちが無理なくのびのびと働ける職場モデルを一般就労の枠組みで確立し、その方々の生活の質を上げること。またそのモデルを社会に広めていく。というもの。

1年目で職場づくりをされ、2年目では仕事（土台）づくりと着実に進めている。環境商品のみならず人材育成にも言及しているところがすばらしい。支援される側だけでなく、「担い手になれるか？」との声からはじまった当プロジェクトは、これからの支えあい助け合う社会の先駆的事例になると期待する。

プロジェクト名： 若者による10代のための自死遺族ピアサポート
助成種別： 市民研究
団体名： 特定非営利活動法人 グリーフサポート・リヴ
代表者名： 佐藤 まどか
所在地： 大阪府

本団体は、1992年に活動を開始。子育て中の親子の支援に始まり、シングルマザーの会や自死遺族の語りの会などの経験を経て、グリーフを体験したおとな・子どもなどさまざまな生きにくさを抱える人のサポートを行う団体として2021年にNPO法人化された。

本プロジェクトは思春期の自死遺族支援として、年齢が近い方による企画、運営により、共感できる活動である。また、同年代の支援、ピアサポートも意義がある。

アンケートは、デリケートな部分もあると思うが、具体的な心の変化を理解することができ、また、定期開催によって、安定した活動が実施できると感じる。

公的資金が付きにくい分野であり、また当事者主体の活動であるので、そのような意味でもこの団体の活動を応援したい。

特に、ピアサポート活動は継続性が大切であり、対象を変えながら、「若い世代に」という着眼点もよいと思う。今後の継続性、展開に期待したい。

継続助成の選考経過と助成の特徴

継続助成 選考委員長 西村 ユミ

【はじめに】

本年度（2023年度）は、継続助成募集の最後の年となります。そのため、助成3年目のプロジェクトのみが対象となり、応募件数は7件でした。都道府県別に見ると、東京からの応募が3件と最も多く、京都府、大阪府、愛媛県、福岡県から各1件の応募がありました。応募種別は、7件が市民活動であり、そのうち3件は市民活動と市民研究の両方でした。応募プロジェクトは、心と体のヘルスケアに関わる多様な活動を既に2年間行っており、一定の成果をあげつつ、さらなる展開の必要性から継続助成の応募をしてくださいました。

選考委員会での審査では、3年目のプロジェクトとしての妥当性と発展性、さらには、助成終了後の継続可能性等についても検討し、6件を助成対象に決定しました。

以下に選考過程と結果を示します。

【選考経過と結果】

継続助成の選考は、以下の日程および手続きにより実施されました。

- ・ 応募期間：2023年8月1日（火）～8月17日（木）
 応募件数：7件（助成3年目）
- ・ 書類選考：8月26日（土）～9月22日（金）
- ・ 選考委員会：9月29日（金）
 選考結果：助成対象6件、助成総額981万円

【書類選考・選考委員会】

書類選考は、委員長も含めて6名の選考委員によって行われました。各委員が、専門性およびこれまでの経験をもとに、ファイザープログラムのテーマである「心とからだのヘルスケア」に関する市民活動・市民研究という視点から、選考基準に沿って評価を行いました。審査においては、各委員がすべてのプロジェクトに対して、仮評価結果、コメントおよび助成にあたっての課題を記載して提出しました。

選考委員会では、各応募プロジェクトについて、実施団体によるオンラインプレゼンテーションを行い、プレゼンテーションと応募書類をもとにした質疑応答を経て、各委員から最終評価が出されました。その後、全委員の評価結果をもとに、評価できる点や改善点を提示し、さらに、プロジェクトの実現可能性に関わる問題点、助成終了後の継続発展の可能性、さらには活動が具体化する提案などを出しながら議論し、全委員が納得するまで議論を重ねて「助成」6件を決定しました。

【継続助成プロジェクトの特徴】

2023年度の選考において採択されたプロジェクトは、心やからだに様々な課題を持つ人たち、その課題によって安全かつ安寧な生活が妨げられていたり生活に困難や制約のある人たちを、当事者の視点にたって支援したり、支援する人を育てたり、その仕組みを作りネットワーク化した

りする市民活動でした。市民研究では、支援のための情報収集は勿論のこと、その成果を学会誌や書籍に掲載することや、政策提言によって広く国や市民へ訴えることが計画されておりました。

ここでは、市民活動と市民研究の両方に取り組むプロジェクトと、市民活動に取り組むプロジェクトを分けて紹介いたします。

1. 市民活動と市民研究

3件のプロジェクトが、市民活動と市民研究の両輪で活動を行います。

まず、『山谷の野宿者を継続的に医療に繋げるためのしくみづくり』（一般社団法人結 YUI）は、山谷の野宿者を継続的に支援するプロジェクトを行います。山谷は、長期にわたって路上生活をおくる野宿者が多く、健康状態が悪化している人や治療そのものを諦めている人、医療を拒否している人などがおり、必要な人が適切に医療に繋がっていない現状があります。本プロジェクトでは、巡回看護の実践と意識調査を行い、野宿者を医療につなげる方法の検討と生活保護や居住支援のあり方を模索します。この調査結果は、政策提言にも繋げることが計画されており、実際の支援にとどまらず、社会に大きなインパクトを与える活動になることが期待できます。

次いで、『食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究』（認定特定非営利活動法人 FaSoLabo 京都）は、専門の医師などへの調査を行うと共に、食物アレルギーの子ども（FA 児）への個別インタビューを実施して、当事者の経験を深く知ると共に、3年間継続して調査を行った大人と子どもの思いの接点を考察します。また、これらをもとに、米国の小児科学会で重要視されている「インフォームドアセント」という概念が、日本の FA 児を取り巻く環境改善に活用可能であることを提案します。調査結果という根拠と子どもにとって重要な概念を導入することで、子どもの視点からの自立支援と FA 児の QOL 向上に繋がることが期待できます。

『コミュニティパントリー活動を広げるためのフードバンク活動連携事業』（特定非営利活動法人 e ワーク愛媛）では、本プロジェクトで実施している複数のコミュニティパントリーの事業実施者への状況調査、およびフードバンク食料の配布に関する調査を行います。これをもとに、フードバンク食料配布システムの類型化と体系化を行い、各パントリーの違いと事業の効果を明らかにします。さらに、この成果を、関係する学会誌や研究会書籍に掲載することを目指します。これらによって、コミュニティパントリーの活動を多くの方に知っていただけると共に、フードバンク活動の継続実施のための知恵を、広く社会で共有できることが期待できます。

これらのプロジェクトの調査では、支援の対象となる当事者や活動をしている当事者の視点が重視されており、市民研究だからこそアクセス可能な調査結果となることが期待できます。さらにそれを学会誌に掲載したり、提言として発出したりすることは、社会に対して大きな影響を与えることになり、社会を変化させることに繋がるかもしれません。その変化した社会において、さらにプロジェクトの活動を継続することは、プロジェクト自体を深化・充実させるとともに、社会をより良くしていくことに繋がると考えます。

2. 市民活動

3件のプロジェクトが市民活動を展開します。

『生活困窮状態にある LGBT 当事者の自立支援と地域ネットワーク構築』（LGBT ハウジングフ

アーストを考える会・東京)では、プロジェクトで提供しているシェルター入居者が、これまで以上に安心して、心身の回復や自立に向けた準備ができるよう、住環境を整備します。さらに、専門性を備えたスタッフを確保して相談体制を充実させると共に、事務局スタッフを配置して運営基盤を整えます。関係組織とのネットワークづくりを目指した取組として、連携会議を複数回実施します。それによって、LGBTの生活における課題を地域の関係者と共有しつつ、これを広く社会に周知し、資金確保にも活かします。これらの取り組みを通して、生活困窮状態にあるLGBT当事者が安心して暮らせる社会の実現が期待できます。

次いで、『リージョナルセンターのための膵癌 SCN サポーター養成講座開発プロジェクト』(特定非営利活動法人パンキャンジャパン)では、患者数、死亡者ともに増加傾向にある膵癌患者とその家族の支援を目指して、米国のSCN(Survivor & Caregiver Network)サポーター育成プログラムの日本語版の開発及び教材の作成を目指します。膵臓がんのゲノム医療は米国で高く評価されていますが、日本ではまだまだその普及に課題が残されています。サポーターは、診断時からゲノム医療を含む最新の医療に関する情報提供を患者とその家族に行い、早期より治療の理解を深め、安心して闘病できるよう支援します。さらに、サポーターがSCNリージョナルセンターに所属することで、支援体制がより強固なものとなり、多くの患者に手を差し伸べることが可能になります。

『病気や障害のある人達と仲間でナビする出会い、体験、まち歩き事業』(特定非営利活動法人わくわく)では、病気や障がい、介護や子育て、コロナ禍等のために、安心して外出できない人を参加者として、自宅や病院にしながら「世界遺産のある街八幡」を中心とした北九州市を満喫できるしくみ作りを継続します。これを実現するために活用しているのは、「分身ロボットオリヒメ」です。参加者が分身ロボットにパイロットして入り、案内役は障害福祉サービス事業利用メンバーや大学生、有志等がチームを作って担います。参加者と案内役は、物理的には距離がありますが、分身ロボットを使って関わりをもつことで、その距離は埋められ、ここに新たな関係が生み出されることが期待できます。そして、それを確認するために、両者へのアンケートも行われます。

これらのプロジェクトは、病気や障がいをもったり、困難な状態にある人たちの支援体制の強化と充実、さらには支援のネットワークを構築・拡張し、継続できることを目指して取り組んでいます。生活困窮状態、治療の理解が難しい状態、そして外出が困難な状態などは、生活の安定や豊かさが妨げられたり、闘病の選択を難しくしたり、活動範囲を狭めたりして、生活の質の保証を難しくします。生活の質を高く保つための支援は、人権を守ることであり、それを支えるプロジェクトの推進は、豊かな生活を可能とする基盤を維持し続けることにも貢献します。

【おわりに】

継続助成は、これまで何度か審査をしたプロジェクトが対象となっております。そのため、選考委員の私たちも、年を重ねるごとに、プロジェクトの発展とその成果を伺うことを楽しみにしておりました。さらに、各プロジェクトの資料やプレゼンテーションからは、プロジェクトの進捗や各支援対象の課題のみならず、ヘルスケア領域に関わる社会のあり方も見えてきました。その意味でも、継続審査は選考委員である私たちが学ばせて頂く機会でもありました。

助成が決まったプロジェクトは、いずれもファイザープログラムが大切にしてきた、地域で暮

らす人々の人権を守り、暮らしを下支えして自立を支援する継続的な取り組みであり、応募団体の皆様の熱意と使命感からは、助成後にも継続・発展し、他の団体をも巻き込んで、社会をも変えていく可能性を見せていただきました。提案されたプロジェクトが各地域に、そして広く社会に根付いていくことを期待します。

最後になりますが、残念ながら助成対象とならなかったプロジェクトも含め、応募を下さったすべての団体の皆様の活動にエールを送ります。

継続助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由

| | |
|----------|----------------------------|
| プロジェクト名： | 山谷の野宿者を継続的に医療に繋げるためのしくみづくり |
| 助成種別： | 市民活動 市民研究 |
| 団体名： | 一般社団法人 結YUI |
| 代表者名： | 義平 真心 |
| 所在地： | 東京都 |

本団体は、東京都台東区にある山谷地域の多様性を活かしたまちづくりを目指す団体として2003年に設立され、生活保護受給者や旅行者を主な対象とした簡易宿泊所の運営や地域住民を対象とした飲食店の運営を行っている。また、野宿者支援に取り組む点に特徴をもつ。

巡回看護の取り組みは野宿者にとって欠かせないものと考えられ、団体自らがフルに活動しているところは評価できる。また、活動日を決めていることによって、活動の継続性が担保されているなど工夫がみられる。

生活保護を受けることが必ずしも野宿者の個々の幸せにつながらない場合、何を改善すれば、心が満たされ、幸せに思えるのか。巡回看護の実践、意識調査の実施の中で野宿者が抱える現状の課題が見えつつある。それらをもとに具体的な政策提言につなげることに期待したい。今後は、他の団体とのつながりも意識しつつ、この活動がさらに充実することを望む。

| | |
|----------|----------------------------------|
| プロジェクト名： | 生活困窮状態にあるLGBT当事者の自立支援と地域ネットワーク構築 |
| 助成種別： | 市民活動 |
| 団体名： | LGBTハウジングファーストを考える会・東京 |
| 代表者名： | 松灘 かずみ |
| 所在地： | 東京都 |

本団体は、生活困窮状態にあるLGBT当事者への、障害や暴力被害などの重複する課題を抱えた相談支援を行ない、居住支援、生活支援を目的に活動している。

本プロジェクトでは、1年目、2年目の取り組みで、シェルターへの入居、ソーシャルワーカー、保健師など専門性を備えたスタッフが相談にあたり、相談体制の整備を行い、これらの取り組みを伝えるリーフレットやカードを作成、啓発を行っている。関係機関との連携会議では、医療、保健、福祉、法律等の専門分野の連携が広がった。全国の生活困窮者支援団体への実態調査を分析し、報告会から交流会へと発展し、ボランティアも現れ活躍している。

3年目では、更なる住環境整備、専門スタッフ確保、連携会議の充実を諮り、情報発信を広げ、協力体制を強化する。当事者の自立に向けた体験や、支援団体の実態調査を活かし、安心して暮らせるためのネットワーク体制、制度への発展へとつながることを期待したい。

| | |
|----------|--|
| プロジェクト名： | リージョナルセンターのための膵癌 SCN サポーター養成講座開発プロジェクト |
| 助成種別： | 市民活動 |
| 団体名： | 特定非営利活動法人 パンキャンジャパン |
| 代表者名： | 眞島 喜幸 |
| 所在地： | 東京都 |

本団体は、難治性癌の筆頭とされている膵癌の研究活動を支援することによって、癌の征圧、公共政策の立案、さらには、膵癌患者や家族等の支援に取り組んでいる。また、本団体には米国本部があり、日米間の情報交換をしながら、膵癌の予防、診断、治療について知識を広めることに特長を見出すことができる。とりわけ、患者と家族をサポートするための膵癌患者と家族のネットワーク事業（Survivor and Caregiver Network:SCN）を展開している。

これらのことを踏まえ、継続助成では、米国本部の SCN サポーター育成講座の日本語版を開発することによって最新の医療が受けられるよう、必要な情報を提供できるサポーターを育成することを目指すものである。

以上の取り組みが実現できたならば、患者や家族が安心して治療にのぞめることになるだろう。そして、進行癌として見つかることの多い膵癌において、本団体が持っている固有のネットワークやノウハウを生かされることによって、膵癌患者や家族はもとより、社会の全ての人たちに対しても安心感を供与できることになるといえよう。

| | |
|----------|------------------------------------|
| プロジェクト名： | 食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究 |
| 助成種別： | 市民活動 市民研究 |
| 団体名： | 認定特定非営利活動法人 FaSoLabo 京都 |
| 代表者名： | 楠 隆 |
| 所在地： | 京都府 |

本団体は、食物アレルギーの子どもと保護者の生活の質の向上を目指し、子どもの視点の自立支援等に取り組んでいる。しかしながら、食物アレルギーの治療における患者教育では、安全を最優先した大人の視点で実施されていたりする。一方で、食物アレルギーは、目に見えない疾患であり、食事の制限という日常生活での対応が必要であるにもかかわらず、福祉の視点が必ずしも重視されていない側面もある。

これらのことを踏まえ、継続助成では、専門医等を訪ね、子どもの自立についての医療のあり方や、子どもの権利擁護の視点について調査を進める。また、食物アレルギーの子どもへの個別インタビューを実施し、これまでの調査の蓄積から、大人と子どもの思いの接点について考察を深めるというものである。

本プロジェクトでは、食物アレルギーの子ども、さらには、その周囲の環境にも目を向けていくという福祉の視点から、ソーシャルワークがいかに貢献できるかについて検討するものであり、新たな発見が大いに期待できるものだといえよう。

プロジェクト名： コミュニティパントリー活動を広げるためのフードバンク活動連携事業
助成種別： 市民活動 市民研究
団体名： 特定非営利活動法人 eワーク愛媛
代表者名： 難波江 任
所在地： 愛媛県

本団体は、困窮者支援として団体が行っているフードバンク活動を、食料を利用者が選び無料で持ち帰ることができるコミュニティパントリーを構築し、県内のフードバンクを実施する他団体と連携し、活動への理解と食料寄贈を増加させながら拠点整備を進めてきた。

助成1年目、2年目では、引き続き他団体との連携を拡大し利用者へのアンケート調査を行いながら、他のフードパントリーの実施方法や利用者の状況、事業の効果などの調査を行い、団体のコミュニティパントリー活動の効果・機能を明らかにするとともに、新たな拠点の設置をすすめる取組みを行っている。

本プロジェクトでは、さらに中国・四国・近畿地方のコミュニティパントリー実施事業者の状況と、他のフードバンクの食料配布方法等に関する調査を掘り下げて類型化・体系化を行い、メリット・デメリットを明らかにし公表する。それにより運営者・利用者にとってよりよい選択と、連携による事業拠点の継続と拡大をめざす。本助成によってコミュニティパントリーの着実な実践と、食料寄付や専門職の参加など、協力者との関わりを増やしながる普及・発展を期待したい。

プロジェクト名： 病気や障害のある人達と仲間でナビする出会い、体験、まち歩き事業
助成種別： 市民活動
団体名： 特定非営利活動法人 わくわーく
代表者名： 小橋 祐子
所在地： 福岡県

本団体は、病気や障がい等の理由により外出困難な人たちが、自宅や病院にしながら分身ロボット OriHime（オリヒメ）にパイロットとして参加し、北九州市のまち歩きを満喫できる仕組みを作り、出かけたくても出かけられない状況を乗り越え、出会いや体験、新たな発見ができる状況をつくりだすことを行う。

本プロジェクトでは、このオリヒメを使って、障害福祉サービスの利用者、市内の大学生、市内の企業の有志がチームを組み実施していくものである。それぞれの立場からの思いがクロスされ、外へのアプローチも増やしながる連携していく。

助成1年目、2年目の活動から地元のサッカーチームや行政など多方面との連携を通じて協力者や役割を増やしてきた。ともに日常的に活動をつくっていく点、障害福祉サービスの利用者以外の障がい者の参加が増えている点を評価した。関わる様々な人々、団体、企業のつながりが地域のまちづくりにつながるよう期待したい。